

ハイデガー『存在と時間』における「歴史性」と選択の問題

——現象学的歴史論の存在論的な拡張に向けて——

東京大学大学院 倉科俊佑

はじめに

ハイデガーは『存在と時間』において、我々の存在とは時間的な「伸び広がり」——伝承されてきた存在理解を、将来の自らの在り方を形作る可能性として選び取り、その都度の私が引き受けること——であると主張する。「歴史性 (Geschichtlichkeit)」とは、我々の実存理解に属するこうした歴史的ダイナミズム(「生起 (Geschehen)」)の構造を析出したものだ (SZ, 20, 374f.)。注目すべきは、「現存在には事実的にそれぞれ自らの「歴史」がある (haben) が、そうしたものがありうるのは、この存在者の存在が歴史性によって構成されているからである」とあるように、我々の実存構造に帰属する歴史性が、同時に、歴史を先立って可能にする条件とされていることだ (SZ, 382; Vgl. SZ, 19)。本稿ではこのテーゼで主張されている歴史性と歴史の関係を検討したい⁽¹⁾。

ハイデガーにとって第一に「歴史とは我々自身がそれであり、我々がそのもとにあるような一つの生起」 (GA80.1,152) であって、世界において出会う他の歴史的な存在者からなる「世界-歴史」とは明白に区別される (SZ, 381)。そうした歴史的な存在者の理解以前に、自らの歴史的状況によってとりうる在り方が規定されてしまっていたり、理解の枠組みを伝統から踏襲してしまっていたりといった仕方で、私の存在理解に際してその可能性の起源として歴史を負っている事こそが、ここでの「歴史」がある」ということだ。すると、「歴史がある」ことは我々の存在理解に先立つ起源としての歴史を前提としているわけだが、それを歴史の後に来るであろう我々の自己理解の構造にすぎない歴史性が可能にするという主張は、倒錯的で支持し難いものと思われる。

それゆえに、ハイデガー研究において『存在と時間』の歴史論は、歴史(存在史)の方が我々の歴史的な存在を可能にする後期の歴史論によって克服されるべき失敗として批判されてきた⁽²⁾。積極的評価を試みる諸研究も歴史性と歴史の関係を回避するような仕方で歴史性を論じるものが大半である⁽³⁾。

そもそも歴史論の文脈においても現象学は、歴史学が行うような歴史の対象化に先立つ我々と過去の相関性を記述することで我々の経験の方からの歴史記述を可能にできるという点では有益であるものの、そうしたパースペクティブへの徹底した内在ゆえに、その発生に先立って過去の側で生じていた

歴史については語り得ないという限界が繰り返し指摘されてきた (Foucault (1966), 336-338; Ricoeur(1985), 180; Grethlein(2019))。『存在と時間』の歴史論もまた、そうした限界を無視して歴史を我々のパースペクティブの関連項へと矮小化する構成的な歴史論とみなされ⁽⁴⁾、現象学的歴史論においてもあまり評価されてこなかった⁽⁵⁾。

しかし、後年のハイデガー自身は存在史を前提した上でなお「現存在が歴史性を経験すること」に意義を認めており (GA9, 336)、歴史性が歴史にとっての可能条件となることと、歴史が歴史性に先立つことは必ずしも両立不可能ではないように思われる。そこで本稿では〈歴史性が歴史を可能にする〉という主張を、そうした歴史的事実の先行性を寧ろ積極的に受容するものとして解釈し、現象学的歴史論の限界とみなされていたものを再考したい。そのために、まず生成史を参照することで歴史性概念が歴史に先立つものではありえないことを確認し (第1節)、次いで歴史性が持つ「選択の選択」という構造から、構成的な歴史論としてのハイデガー解釈を退ける (第2節)。最後に歴史性における実存様態である「運命」と歴史との関わりから、歴史性が歴史を可能にするというテーゼの内実を示す (第3節)。

1. 現象学の歴史化としての歴史性

ハイデガーは『存在と時間』の歴史性の議論に対して「デイルタイの諸研究の我有化」 (SZ, 377) と「今後遂行される哲学の歴史の史的解体という課題の解明の準備に資するもの」 (SZ, 392) という特異な位置づけを与えている。重要なのはこれが「歴史的意識」と「哲学」の間の「緊張関係」 (GA63, 42) という当時のドイツ哲学における歴史を巡る論争へのポジショニングであるということだ。歴史的意識はあらゆる対象を歴史的な生成変化の産物と捉えることで、哲学者の考える普遍的真理に懐疑を突きつける (Schnädelbach (1983), 54-69)。哲学を歴史学の経験的領域から厳密に区別したフッサールや、歴史認識をア・プリオリに基礎づける超越論的学問論として哲学を位置づけた新カント派の方法は、ハイデガーからすれば哲学をこの歴史的意識から擁護する試みであった (GA56/57, 129-176)。

これに対しハイデガーは「歴史的意識」を現象学の着手点と位置付け⁽⁶⁾、歴史的生の遂行的な自己理解をあらゆる理論に先立つ根源的な叙述と位置づけた⁽⁷⁾。これは哲学を歴史的意識に内在した生の「歴史的自己省察」 (GS. V, 7) と考えるデイルタイの継承であり、その克服を試みる同時代の哲学の批判へとハイデガーを向かわせた (GA63, 42; GA21, 91)。ヴィースが指摘する通り、こうした同時代の歴史論との関係を顧みることなしには、ハイデガーの

歴史論を実際の歴史から距離を置くものとして誤解することになる (Veith (2013), 306)。

最大の批判点は、哲学自体が一つの歴史的生によって遂行されているにもかかわらず、それを没歴史的な認識主体と客体的歴史とに分離することは、自らの哲学的営為が依拠する歴史的生を「脱・歴史化」(GA56/57, 89) し、歴史を「理論による理念化と抽象化の相関項、あらゆる具体的な現在を度外視した規定」(GA59, 71) に貶める自己倒錯である、というものだ⁽⁸⁾。レーヴイットに代表されるハイデガー歴史論の「超越論性」への古典的批判——『存在と時間』の歴史論は、特定の事実的条件によって初めて構成されるはずの歴史的事実を、「現存在の無条件的な歴史性」(Löwith (1984), 166f.) へと不当にすり替えるものではないか——は、他ならぬハイデガー自身が同時代の超越論哲学に向けていたものであったということだ。

なぜこのような行き違いが生じたのだろうか。歴史性の議論の発生が見られる 1923~1925 年頃のフッサール批判を見てみよう。フッサールは『厳密な学としての哲学』において、ディルタイによる歴史的生への定位は哲学が満たすべき客観的妥当性を懐疑へと陥らせる以上、哲学の原理となりえないと主張する (Hua. XV, 44)。ハイデガーはこれを歴史的意識の克服の典型とみなし、厳しく批判した (GA17, 88-100)。中心的な主張は、厳密学が扱う普遍妥当的な真理の領域と、事実学が扱う経験の領域を分割し、前者に根源的な「事象そのもの」を見出そうとするフッサールの現象学的態度自体が、デカルト以来の「全く陳腐化したプラトン主義」(GA17, 94) という歴史的産物ではないか、という点にある。「現象学は歴史に左右されないものとして歴史の外側に立っているわけではない」(GA80.1, 132) のだから、歴史的に形成されてきたはずの現象学的主体を歴史から切り離すことは、そこから自らの学的態度が生じているはずの「歴史的に在ること」という「事象そのもの」を覆い隠す「怠慢」(GA17, 300) であり、現象学的な自己省察の方法として正当性を欠く。「現象学的解体」はこの欠点を克服すべく以前から導入されていた方法であり、哲学的概念や理論の歴史的起源へと遡ることで、現象学自身が無自覚に隠蔽している歴史的前提を、その発生という根源的な「事象そのもの」の方から暴き立てる方法であった (GA59, 29; GA24, 30f.)。

注目したいのはフッサール批判の内実よりも——これは後年のフッサール自身によって克服されるだろう——批判の方法の不十分さである。そもそも両者の方法論的対立は、現象学に先立って歴史的に形成されていた経験的自我と、現象学によって没時間的に妥当する仕方を取り出された超越論的自我の、どちらを根源的とみなすかという前提の対立に発している。従って、現

象学的解体を十全に正当化するためには、それが前提する歴史的生の根源性を正当化すると同時に、現象学の「没歴史性と反歴史性」が由来する「既在のものは自分に関係のないものとして払いのけることができるし、自分自身から出発すれば事象に到達できる」(GA80.1, 155)という信念を反駁しなければならないはずだ。ところがハイデガーは、フッサールとデカルトの解釈学的な照合作業によって、両者の理論の事実的な一致を示すにとどまっていた。しかしこれでは、フッサールの厳密学は歴史的な状況を超えた普遍的な学的態度であるから、結果的にデカルト以来の伝統と一致したのだとも反論できてしまう。

従って、解体を現象学の方法として正当化するためには、我々が歴史的にあることを厳密な現象学には捨象されるような生の事実的側面として素朴に前提するだけでは不十分であり、あらゆる瞬間において必然的に措定される現象学的主体の本質構造として基礎づける必要をハイデガーは自覚していた(GA17, 321; GA80.1, 131)。歴史性は、まさに全体的かつ根源的なものとして歴史的事実を開示する条件であるという点でこの要請を満たしていた(Vgl. GA64, 85, Anm.1)。

〈現存在は歴史的である〉というテーゼは、人間は多かれ少なかれ世界史の営みにおける一つの現実的な「原子 (Atom)」を演じており、状況や出来事に翻弄され続ける球であるといった、単なるオンティッシュな事実だけを意味するのではない。このテーゼが示しているのは、どのような点において、また、いかなる存在論的諸条件に基づいて、本質体制としての歴史性が「歴史的な」主体の主体性に属しているのか、という問題だ。(SZ, 382)

こうした歴史性への移行は、ディルタイに歴史的生の存在論的な基礎づけを求めるヨルクの批判を摂取することで生じたものでもあった (Dilthey & Yorck (1923), 191; Heidegger(1993), 207; GA80.1, 131; SZ, 399)。歴史性の議論がディルタイの批判的継承かつ現象学的解体の正当化とされたのはこうした事情からである。従って〈歴史性が歴史を可能にする〉というテーゼは、当時の超越論的認識論が排除ないし客体化しようとした歴史を、認識地平の担い手自体が常に歴史的に存在していることとして現象学に積極的に取り込む主張として解釈されなければならない。

しかし、こうした要請は明らかな危険を抱えてもいる。ガンダーが指摘す

るように、現存在の理解の構造である歴史性を歴史の可能性の条件とすることは、論証の仕方からして、歴史に内在するはずの生を超歴史的主観と客体的歴史へと分割する議論に後退しかねないからだ⁽⁹⁾。一方でハイデガー自身は、『存在と時間』においてもリッカートやジンメル認識論を歴史の客体化として批判し (SZ, 375)、「事実的な実存として現にあった可能性」としての歴史が「超時間的な範型という色あせたものに倒錯されてしまう」ような歴史理解を「非本来的」と退けている (SZ, 395)。この記述を好意的にとれば、『存在と時間』において本来的とされる歴史理解に基づく歴史性は、歴史を客体化する超歴史的な主観からは厳密に区別されるはずだ。こうした対立が歴史性においても確かに維持されていることを、まず決意性の分析から確認しよう。

2. 選択の選択としての歴史性

歴史性は我々がそれを通して自らの在り方を理解し選択していくような諸可能性を、常に既に歴史的に伝承されてきた解釈を被った可能性(被解釈性)として自覚的に理解する、そうした先駆的決意性の開示構造である (SZ, 383)。本節では、こうした歴史性が、没歴史的な現象学的主観の相関項へと歴史を貶めるものではないことを示したい。

まず決意性とは何を指すのかを簡単に確認しよう。我々は常に事実として特定の在り方に投げ込まれてしまっているが、それは自ら定立したものではないし、撤回して再定立できるものでもない。ハイデガーはこれを被投性の二重の「否定性」と特徴づけ、我々は本質的に「否定性という根拠を在る」という「負い目」を負っていると主張する (SZ, 283-285)。日常においては隠されたこの負い目を自覚し、被投性を通して自己を理解しようとするのが「決意性」と呼ばれるのである (SZ, 296f.)。従って決意性は、死への先駆によって事実的状况から一旦分離された自己存在に、特定の在り方への「負い目」という仕方で事実性を再び照射する役割を果たす (SZ, 383)。歴史性において重要なのは、「負い目を-負うことは過去を-在ることである」(GA80.1, 145)ということだ。ここでの「過去を-在る」は、私が既に具体的な解釈のもとで事実に定まっていたように在るしかないことを意味する。こうした被解釈性への事実的拘束は、被投性として一つの「負い目」である。それゆえ、歴史性において決意性は、先駆によっては形式的にしか開示されなかった実存諸可能性全体のそれぞれが、既に歴史的に形成された具体的内実を負わされていることを示すものになる。

ここで歴史性における決意性の開示構造として「選択の選択」(GA80.1,

145; SZ, 268, 383) という定式に注目したい⁽¹⁰⁾。「選択の選択」は、従来の歴史性解釈においては評価されなかったが、その一因は、なぜ歴史の実存の開示が選択的であるのかが適切に理解されていないことにある。問題は、自らの実存を被投的なものとして、つまり特定の歴史によって既に定められてしまっているものとして開示することと「選択」が両立しないように見えることだ⁽¹¹⁾。このことは、既に定まっている歴史を無理やり「選択」することは偏った歴史理解を恣意的に構成する「通常の」歴史理解に対する暴力性（Krockow (1958), 80）であるとの批判を招いてきた⁽¹²⁾。

そもそも歴史にとっての選択の必要性を主張したのはリッカートであった⁽¹³⁾。曰く、あらゆる過去が歴史となる訳ではない以上、歴史を構成するものは歴史として語られるに値する文化的「価値」が妥当すると判断されたような過去に限定される（Rickert (1926), 83f.）。ハイデガーはこれを超歴史的な価値理念の外挿によって歴史を選別の客体に転倒させるものであるとして歴史的生からの越権性を批判していた（GA59, 66-74）。歴史の「選択の選択」もそうした「選別」に対する批判的意図の元で考えられた定式であれば、歴史を恣意的に構成するような選択を寧ろ退けるものになる。

ハイデガーは、知られている限りの過去の出来事（*historia rerum gestarum*）が歴史であるとして、過去と歴史の区別には同意するため（GA80.1, 152; SZ, 379）、歴史が選択された過去であることは認める。その上で、それが事実から乖離した歴史の構成となることを回避するために「史学にとって可能的対象であるべきものは何かという「選別」は現存在の歴史性をもつ事実的で実存的な選択の中で既になされている」（SZ, 395）という事実性の視点から、選択の主体を逆転させる。

現存在はいわば自らが没頭したものによって選ばれてしまっている。

[...] 決意性はむしろ現存在に、自らが選ばなかったということにおいておのずと負い目を負わせる。先駆する現存在は負い目を負い、負い続けることにおいて自らの過去を存在する。（GA64, 59f.）

つまり、我々は被投的でさしあたりは世人的であるがゆえに、歴史の選択は自らに先立つものへと譲り渡されるのである。

しかし、これだけでは歴史性は歴史的决定に追随するものに過ぎず、歴史を可能にする機構にはなりえない。そこで、日常性に埋没した被選択性という負い目を開示する異なる位相の「選択」として決意性が導入される。この

「選択」が「選択の選択」であるとはどういうことだろうか。『存在と時間』において初めてこの定式が導入されるのは、「世人からの自己の選び直し」が「一つの選択を後から選択し直すこと (*Nachholen einer Wahl*)」であることの言い換えとしてである (SZ, 268)。つまり、自分自身が選択することに先立って日常的に与えられる、既に歴史的に選択されていた自らの事实在り方の理解を、改めて自己の方から把握することを選ぶという、既に与えられた選択に対する事後的な選択が「選択の選択」と呼ばれるのである (GA64, 54; GA80.1, 144)。ここでの二つの「選択」は、歴史による選択を通して狭められた幾つかの選択肢の中から私が更に一つの可能性を選ぶような選択ではなく、根本的に位相の異なる二つの選択である。つまり、前者はどのような存在者との関わり方や自己理解の仕方が歴史から与えられているかという〈歴史現象が予め持っている内実に関するオンティッシュな選択がされていること〉であり、後者はそれが、そこで私に現前している存在者という表層から開示されるのか、それとも、存在者と関わる私の実存という根本から開示されるのかという〈歴史現象が現れる仕方に関するオントローギッシュな選択をすること〉なのである (Vgl. SZ, 298)。

ここから我々は「決意性における選択的開示は歴史を恣意的に構成するものではないか」という批判に反駁することができる。「選択の選択」は既に選択された同じ一つの実存可能性の現象の仕方を変様するにすぎないから、私が事実にどう在るかは既に歴史的に与えられた日常的諸可能性から乖離しようがなく (SZ, 179)、そもそも特定の可能性を恣意的に選択できるようなものではない。「選択の選択」は、歴史をまさに私の在り方の内実を選択的に構成してしまっているものとして私の方から自覚的に捉え直す歴史の開示の作業であって、私のほうが歴史を構成するような選択にはなり得ない。

むしろ、「本来的な実存論的理解は伝えられてきた被解釈性からは決して逃れることができないため、この理解はその都度 [...] 選ばれてしまった可能性を決断において掴み取る」 (SZ, 383) という一節からもわかる通り、我々の実存は徹底して歴史的な被解釈性に内在するがゆえに、その内実を先駆的決意性によって先立つ歴史へと委ねることで根本的には「無力(Ohnmacht)」 (SZ, 384) なものとなる。しかし、そうした「無力さ」を受け入れることは歴史が与える内実を通して自己を初めて具体的に理解することを可能にする「卓越した力 (Übermacht)」 (ebd.) となるのである。

3. 歴史の不可逆性としての「運命」

最後に「選択の選択」における我々の実存様態である「運命 (Schicksal)」

を検討したい。「運命」とは「自らの実存の根本において歴史的に在ること」であり、伝統的に形成・伝承されてきた「遺産」(SZ, 383)とでも言うべき先行解釈を、自らの在りようの事実的な内実として受容し、自らが取りうる在り方が歴史的でしかありえないことを自覚した実存の様態を指す(SZ, 385)。この「運命」概念は、過去に起源を持つはずの歴史的諸可能性をけっきょく私の「振る舞い」に還元することで、歴史的諸可能性から過去を捨象して「脱歴史化」するのではないかと批判されてきた(Figal(1988), 320)。こうした批判に応えることは、現象学的歴史論は自らが内在する地平の成立以前の歴史を語り得ないのではないかと、という先述の批判に対する回答にもなるだろう⁽¹⁴⁾。

運命は「選択の選択」における実存である以上、運命が引き受ける歴史的な諸可能性には、以下のような自己理解の変様が生じている。

現存在がいつそう本来的に決意するに応じて [...] 自らの実存可能性を選択的に見出すことはよりいつそう一義的で非偶然的になる。死への先駆だけがあらゆる偶然的で「暫定的」可能性を追放する。(SZ, 384. 下線部引用者)

批判者の多くは、こうした運命が死への先駆によって与えられる「単一性」(ebd.)を持つことから、その「非偶然的」性格を、あらゆる諸可能性の根源に端的な自己存在が一貫して前提されることの必然性と捉えてきた。この解釈は間違いではないが、その実存の開示が死への先駆だけによって担われるものではなく、決意性によって被投的なものとして開示されることを看過している。被投性とはまさに「自らが在り、また在らざるをえない」(SZ, 284)という意味で事実的な実存諸可能性に必然性を与えるものであり、そして何より「過去を在る」という起源への負い目を意味するものでもあった。そこで歴史的諸可能性に与えられている運命的な必然性を、既に見た被投性もつ二重の否定性から捉えることで、それが歴史と切り離されたものではありえないことを確認したい。

第一の否定性とされたのは、被投性は我々が既にそれを在ってしまっている実存諸可能性が「現存在自身に属するとはいえ現存在自身として自らに与えたわけではない」(SZ, 284)という所与性であった。こうした意味での必然性は、我々に既に与えられていた事実的な規定の起源として歴史を照らし出すものになる。

第二の否定性とされたのは、被投性において与えられた実存諸可能性は既に事実に成立しているものであるため、それを遡って撤回することはできないということであった (SZ, 284)。「被投的なものとして在りながら、現存在は自らの諸可能性に常に遅れを取っている」(ebd.)と言われるように、これは必然的な所与性に対する私の不可逆な遅延性でもある。そうである以上、被投性は、不可逆に与えられた「それがその都度既にそうあったような仕方」に立ち戻って「私が在ってきたように・在る」ことで予め将来的な存在を規定するものとして引き受けざるを得ない (SZ, 323)。それゆえ、被投的な実存の必然性は、過去に由来する所与性や現在の歴史的条件の不可逆性に留まらず、我々の実存を将来の方から一貫して拘束する「根源的な運命の伸び広がり」(SZ, 391)と呼ばれるのである。

そこにおいては、既に在った仕方を自身と切り離された過去として理解する事はできず、過去との一貫性を持った同じ一つの自己として自己を理解せざるをえない。「先駆において現存在は、自らの唯一の過ぎ去りの可能性において自らの唯一の運命がもつ唯一の今回限り性として可視化される」(GA64, 124)と述べられるように、私は如何なる瞬間においても私が取りうる唯一一つの運命として自らの歴史的諸可能性を引き受けるしかないのである。ブランドナーが指摘するように、こうした必然性は因果的な必然性とも論理的必然性とも区別された「別様でありうることの奪われとしての過ぎ去りの「不可逆性」という歴史的過去に特有の必然性と言えらる(15)。

従って、歴史的解釈によって既に規定された実存理解の内実は、事実に偶然的な仕方と与えられたにすぎないものではあるが、先駆的決意性において運命的実存に移行した現存在はそれを、私がどう在ろうか選択しようとするよりも先に必ず与えられてしまっている既在の不可逆な被選択性として捉え、他ならぬ私の将来の可能性としてその都度の事実に迎へ入れることで、歴史を初めて他ならぬ自分のこととして開示する(16)。これは偶然的な歴史現象を必然的な可能性として受け容れるような、より強い受容性における実存である。

これが「より強い」受容と言えらるのは、運命は本来の歴史性における実存として、非本来の歴史性から厳密に区別されるためだ。ここで言う非本来の歴史性は、現在の歴史的状況は過去の出来事の結果である、といった因果的な出来事連関の次元からしか歴史を受容できず、過去を現在の状況の偶然的な原因として切り離し、現在の地平から理解するような歴史の不当な開示ないし隠蔽構造を指す (SZ, §75; GA64, 89-93)。こうした現在中心の歴史観は、過去を過ぎ去ったものとして振り払って歴史的拘束性にとらわれない将

来を見据える「歴史的意識」の克服を理論的に許容してしまうものであり、被投性における過去への負い目を受容しきれない。それに対して、運命的な実存は、死に至るまでのあらゆる事實的諸可能性の全体が、既に歴史によってその内実を抜き難く規定されているであろうことを我々に引き受けるよう迫ることで、より強い受容となりうるのである。

従って、運命における歴史諸可能性とは、その都度の振る舞いの選択肢として採用されたりされなかつたりするものではなく、わたしの在り方を必然的に決定してしまっている歴史的過去を含み込んだ私の在り方の規定であり、寧ろ「現在において自らの手中にあるような地平の中で過去を見る」非本来的歴史理解 (GA64, 90) を退けるものだ。これは運命を現在の私の地平に還元された「脱歴史化」とみなすハイデガー批判への反駁となると同時に、ハイデガー自身にとっては、「自分は新しく始まることができ、気楽に構えつつ、任意に過去の哲学者から刺激をもらうこともできると信じ」という過去の「おごなり、つまり受け止めなかつたという負い目がある」(GA19, 11) 同時代の哲学や現象学への根本的な批判を完成させるものであった。

詰まるところ、「運命」とはまさに歴史的実存が、自らが歴史的必然性のうちにあることを自覚し、それを積極的に引き受けるべく歴史へと開かれようとする在り方である。実際、歴史が我々に現象として迫ってくるのは、歴史学習のようなもはや我々の日常からは切り離された過去を見知るようなときではなく、既に与えられてしまっていた私が現に在る仕方がどうにも動かしがたいという拘束性や取り返しのつかなさを実感し、その起源としてどうしても過去が無視せざるをえないようなときではないだろうか⁽¹⁷⁾。翻って、歴史性が歴史の現れを可能にするのは、そこにおいて、私の実存が必然的な仕方その内実を過去に依存しており、かつそれを将来的な可能性として引き受けるという仕方ではしか実存できないという運命性が自覚され、歴史が初めて私に対して強烈な当事者性を帯びて迫ってくるからだと言えるだろう。〈歴史性は歴史を可能にする〉というテーゼは、まさにそうした切迫した当事者性のもとで現象するものとして歴史を位置づけるのである。

結びにかえて

まとめよう。歴史性において先駆的決意性が開示する「運命」的実存は、必然的所与として先立つ歴史に自己理解の具体的な内実の選択を全面的に依存している以上、予め自己を規定する起源として歴史がいかなる瞬間においても無視できなくなるような仕方で、常に先立つ歴史を積極的に受容するべく開かれている。歴史性はその自覚的な受容の選択へと我々を開くことで、

我々に歴史があるという事態が常に有意味な仕方で理解されるための条件となる。そうした意味で、歴史性は歴史を可能にしているのである。

また我々はこうした解釈が、歴史を構成するものでもなければ、自らの地平に先立つ歴史に対して閉じられたものでもないことを、決意性概念と運命概念を通して確認した。これは序論で述べたような現象学的歴史論の限界とされてきたものの拡張可能性を示唆するものだろう。ザハヴィが言うように現象学が自らの限界を拡張するために発生的起源へと遡行するのであれば (Zahavi(2017), 132-136)、我々は認識論的な反省の枠を超えて、そのような遡行をそもそも可能にしている、我々の歴史的な在り方と我々を巻き込み特定の在り方へと投げ入れる歴史との存在論的な関係を問わねばならない。そうした限界を超えるものとして「本来的歴史存在は [...] 開示されうるであろう過去と向きあいながら、それに突き動かされることに正しく備えてある状態へと自らをもたらす」(GA64, 94) ののであれば、我々にとっては未だ隠された状態にある「開示されうるであろう過去」との関わりについての記述として、『存在と時間』以後のハイデガーの歴史論を読むことができるだろう。

註釈

(1)本稿では『存在と時間』と同時期の講義、1924年の論文「時間の概念」と講演『時間の概念』(GA64)、1925年の講演『ヴィルヘルム・ディルタイの研究活動と史学的世界観を巡る現代の闘争』(GA80.1, 105-157)を適宜参照した。これらを『存在と時間』の歴史論の原型とみなす代表的な生成史研究として、Kisiel(1995), 315-361.

(2)代表的なものとして、Pöggeler(1983), 149; Figal(1988), 314; Figal(2020), 96f. なお、歴史性への批判にはハイデガー自身が語ったとされる歴史性とナチス参与の結びつきから解釈を方向づけるものもあるが、その是非については本稿では扱わない(Löwith(1986), 56f.; Trawny(2016), 74)。

(3)『存在と時間』の歴史論を自己一貫性や物語的自己同一性の議論と位置づける解釈者は、私から隔たった過去にまで遡るはずの歴史を私の個人史に縮小してしまっている(Heinz(1982), 138-163; Blust(1987), 313-328; 高井(2022), 183-204)。現存在の世界地平を構成する存在理解の変遷が存在論の歴史であることに『存在と時間』の歴史論の意義を見るような超越論的解釈者は、そうした歴史と歴史性がどう関わるのかに殆ど言及しない(Rombach(1980), 19-24; Crowell(2001), 210f.; 中西(2021))。

(4)もっとも、20世紀後半のいわゆるポスト現象学による批判以前から、ハ

イデガーが歴史解釈に現象学的方法を持ち込むことの強引さはディルタイ学派によって『存在と時間』の草稿期から既に批判されていた（Vgl. 的場(2001)）。

(5) 代表的な論者であるカーは、ハイデガーを後期フッサールやフランス現象学の歴史論に道を開いた一つの契機としてしか見ておらず、その内実には踏み込まない（Carr(2014), 159-167）。

(6) GA56/57, 130; GA60, 33; GA61, 73f.; GA63, 35; GA80.1, 105. なお、ここでの「歴史的意識」は認識主観としての「意識」を含意しない。

(7) この方法は「事実性の解釈学」としてよく知られるが、その主題である「事実的生」は常に歴史的な生とされていた（GA58, 256; GA60, 9, 82; GA61, 159）。

(8) こうした批判はロツツェ、リッカート、ジンメル、シュペングラーらの議論の検討として展開されたものだが、その詳細は割愛する（GA56/57, 84-94; GA59, 66-74, GA60, 47f.）。

(9) Gander (2001), 356. これに対し初期思想の歴史論と『存在と時間』を連続的に捉える解釈としては伊藤（1996）や松本（2012）がある。

(10) 「選択の選択」は自由論の視点から専ら注目が集まってきた（Vgl. SZ, 384; Han-Pile (2013)）。

(11) ドレイファスとルビンは「現存在が全くもって選択しない」ことを「選択を選択する」と表現するのはミスリーディングであるとすら主張する（Dreyfus&Rubin (1991), 318）。

(12) 運命における選択の恣意性については景山がより洗練された批判を行っているが、歴史性については言及されていない（景山（2013）, 163-167）。

(13) この発想はリッカートに限らず歴史構成主義的論者によく見られるものである。両者の影響研究としては既に Bambach(1995) や Farin (2009) があるが、この論点は扱われていない。

(14) 現在の世界地平に歴史的な諸可能性が還元されてしまうことを前期ハイデガーの歴史論の限界として指摘したものとしては溝口（1997）がある。

(15) Brandner (1994), 137. ただし、ブランドナーはこの必然性を外挿的な原因や原理を必要としない点で現存在の実存に全く内在するものと捉えており、我々が第一の必然性として示した先立つものからの所与性を捉えきれていない。またブランドナーに限らず多くの解釈者が指摘しているように、この不可逆な過ぎ去りは現存在の本来的な時間性には還元しきれない過去の動性を示唆するものである。

(16) 過去の他者に由来するはずの歴史をまさに我が事として開示すること

は、ともすると、フィガールが批判するように私と起源的過去の間の「疎隔性」を看過した議論になりうる (Figal(1988), 322)。本稿から示唆できるのは、仮にそこで歴史的起源と私の同一化が生じているならば、それは私の実存の方を徹頭徹尾過去の受容として構成するものであって、少なくとも現在の私の実存を一方向的に過去に投影するものではない、ということである。しかし、それでも、私が受容可能であるという相関性にすら還元しえない歴史的過去という問題は残るだろう (Vgl. Derrida (2013), 216)。これについては「反復」概念や『存在と時間』以後の歴史論の詳しい検討を要するため、稿を改めて論じたい。

(17)歴史性を「人間的自由のディアレクティシユな自己壊滅」と捉える辻村の解釈は、ヘーゲル的な歴史法則論へと接近しすぎてはいるが、こうした見方を最もラディカルに打ち出していた(辻村(1971), 215)。

参考文献

(1) ハイデガーの著作

ハイデガーの著作からの引用は『ハイデガー全集』(Heidegger, Martin. 1975-. *Gesamtausgabe*, Klostermann, Frankfurt a.M.)を参照し、略号 GA と巻数を付した。ただし『存在と時間』からの引用は、慣例に習って全集版ではなくニーマイヤー版を参照し、略号 SZ を付した。

GA9: *Wegmarken*, Friedrich-Wilhelm von Herrmann (Hg.), 1976.

GA17: *Einführung in die phänomenologische Forschung*, Friedrich-Wilhelm von Herrmann (Hg.), 2. Auflage, [1994]2006.

GA19: *Platon: Sophistes*, Ingeborg Schüßler (Hg.), 1992.

GA24: *Die Grundprobleme der Phänomenologie*, Friedrich-Wilhelm von Herrmann (Hg.), 2. Auflage, [1975]1989.

GA56/57: *Zur Bestimmung der Philosophie*, Bernd Heimbüchel (Hg.). 2. Auflage, [1987]1999.

GA58: *Grundprobleme der Phänomenologie*, Hans-Helmuth Gander (Hg.). 1992.

GA59: *Phänomenologie der Anschauung und des Ausdrucks: Theorie der philosophischen Begriffsbildung*, Claudius Strube (Hg.), 1993,

GA60: *Phänomenologie des religiösen Lebens*, Matthias Jung, Thomas Regehly & Claudius Strube (Hrsg.)

GA61: *Phänomenologische Interpretationen zu Aristoteles: Einführung in die phänomenologische Forschung*, Walter Bröcker & Käte Bröcker-

- Oltmanns (Hrsg.), 2. Auflage, [1985]1994.
- GA62: *Phänomenologische Interpretationen ausgewählter Abhandlungen des Aristoteles zur Ontologie und Logik*, Käte Bröcker-Oltmanns (Hg.), 2005.
- GA63: *Ontologie (Hermeneutik der Faktizität)*, Käte Bröcker-Oltmanns (Hg.), 1988.
- GA64: *Der Begriff der Zeit*, Friedrich-Wilhelm von Herrmann (Hg.), 2004.
- GA80.1: *Vorträge Teil 1 :1915-1932*, Günther Neumann (Hg.), 2016.
- SZ : *Sein und Zeit*, 19. Auflage., Max Niemeyer, Tübingen, 19. Aufl., 2006.
- Heidegger, Martin. 1993. „Martin Heidegger und die Anfänge der »Deutschen Vierteljahrsschrift für Literaturwissenschaft und Geistesgeschichte«,“ Joachim W. Storck & Theodore Kisiel (Hrsg.), in *Dilthey-Jahrbuch für Philosophie und Geschichte der Geisteswissenschaften*, Bd. 8, 181-225.

(2) ハイデガー以外の著作・文献

一部の古典的著作は慣例に従って括弧内の略号を用いた。

- Bambach, Charles R. 1995. *Heidegger, Dilthey, and the Crisis of Historicism: History and Metaphysics in Heidegger, Dilthey, and the Neo-Kantians*, Cornell University Press, Ithaca.
- Blust, Franz-karl. 1987. *Selbstheit und Zeitlichkeit: Heideggers neuer Denkansatz zur Seinsbestimmung des Ich*, Königshausen & Neumann, Würzburg.HW
- Brandner, Rudolf. 1994. *Heideggers Begriff der Geschichte und das neuzeitliche Geschichtsdenken*, Passagen, Wien.
- Carr, David. 2014. *Experience and History: Phenomenological Perspectives on the Historical World*, Oxford University Press, New York.
- Crowell, Steven Galt. 2001. *Husserl, Heidegger, and the space of meaning: paths toward transcendental phenomenology*, Northwestern University Press, Evanston.
- Derrida, Jacques. 2013. *Heidegger : la question de l'Être et l'Histoire : Cours de l'ENS-Ulm (1964-1965)*, Galilée, Paris.
- Dilthey, Wilhelm. & Yorck von Wartenburg, Paul, Graf. 1923. *Briefwechsel zwischen Wilhelm Dilthey und dem Grafen Paul Yorck v. Wartenburg*,

- 1877-1897, Erich Rothacker (Hg.), Niemeyer, Halle.
- Dilthey, Wilhelm. [1924]1964. *Die geistige Welt: Einleitung in die Philosophie des Lebens; Hälfte 1, Gesammelte Schriften* Bd. 5, 4. Auflage, B.G. Teubner, Leipzig. (=GS. V)
- Dreyfus, Hubert L. & Rubin, Jane. 1991. "Kierkegaard, Division II, and Later Heidegger," in *Being-in-the-World: A Commentary on Heidegger's Being and Time, Division I*, The MIT Press, Cambridge.
- Farin, Ingo. 2009. "Early Heidegger's Concept of History in Light of the Neo-Kantians," *Journal of the Philosophy of History*, 3(4), 355-384.
- Figal, Günter. 1988. *Martin Heidegger: Phänomenologie der Freiheit*, Athenäum, Frankfurt a.M..
- Figal, Günter. [1992]2020. *Martin Heidegger zur Einführung*. 8. ergänzte Auflage, Junius, Hamburg.
- Foucault, Michel, 1966. *Les mots et les choses : une archéologie des sciences humaines*, Gallimard, Paris.
- Gander, Hans-Helmuth. 2007. „Existenzialontologie und Geschichtlichkeit," in *Martin Heidegger Sein und Zeit*, Thomas Rentsch (Hg.), *Klassiker Auslegen* Bd. 25, 2. Auflage., Akademie Verlag, Berlin, 229-251.
- Grethlein, Jonas. 2019. "Experience and History: The Reach and Limits of Phenomenological Approaches to History," *History and Theory*, 58(2), 302–312.
- Han-Pile, Béatrice, 2013. "Freedom and the "Choice to Choose Oneself" in Being and Time," in *The Cambridge Companion to Heidegger's Being and Time*, Charles B. Guignon (ed.), Cambridge University Press, Cambridge, 291-319.
- Heinz, Marion. 1982. *Zeitlichkeit und Temporalität : die Konstitution der Existenz und die Grundlegung einer temporalen Ontologie im Frühwerk Martin Heideggers*, Rodopi / Königshausen & Neumann.
- Husserl, Edmund. 1987. *Aufsätze und Vorträge (1911–1921)*, *Husserliana* Bd. XXV., Thomas Nenon & Hans Rainer Sepp (Hrsg.), Nijhoff, Den Haag. (=Hua. XXV)
- Kisiel, Theodore. [1993]1995. *The Genesis of Heidegger's Being and Time*, [reprinted], University of California Press, Berkeley.
- Krockow, Christian Graf von. 1958. *Die Entscheidung: eine Untersuchung*

- über Ernst Jünger, Carl Schmitt, Martin Heidegger*, Enke, Stuttgart.
- Löwith, Karl. [1953]1984. *Heidegger—Denker in dürftiger Zeit, Sämtliche Schriften*, Bd. 8, Klaus Sticheweh & Marc B. de Launay (Hrsg.), Metzler, Stuttgart.
- Löwith, Karl. 1986. *Mein Leben in Deutschland vor und nach 1933*, Metzler, Stuttgart.
- Pöggeler, Otto. 1983. *Heidegger und die hermeneutische Philosophie*, Alber, Freiburg.
- Rickert, Heinrich. [1899]1926. *Kulturwissenschaft und Naturwissenschaft*, 6.Auflage., J. C. B. Mohr, Tübingen.
- Ricœur, Paul. 1985. *Temps et Récit Tome III*, Seuil, Paris.
- Rombach, Heinrich. 1980. „Das Phänomen Phänomen,“ in *Phänomenologische Forschungen*, Bd. 9, Meiner, Hamburg, 7-32.
- Schnädelbach, Herbert. 1983. *Philosophie in Deutschland 1831-1933*, Suhrkamp, Frankfurt a.M..
- Veith, Jerome. 2013. "Destruction and Repetition: Freedom and Historical Belonging in Heidegger," in *Heideggers Marburger Zeit: Themen, Argumente, Konstellationen*, Tobias Keiling (Hg.), Klostermann, Frankfurt a.M., 305-318.
- Zahavi, Dan. 2017. *Husserl's legacy: phenomenology, metaphysics, and transcendental philosophy*, Oxford University Press, Oxford.
- Trawny, Peter. 2016. *Martin Heidegger: Eine kritische Einführung*. Klostermann, Frankfurt a.M.
- 伊藤徹. 1996. 「ハイデッガーと歴史性——初期フライブルク講義から見た『存在と時間』第二編第五章」, 『歴史の現象学』, 現象学・解釈学研究会編, 世界書院, 93-127.
- 景山洋平. 2015. 『出来事と自己変容』, 創文社.
- 高井ゆと里. 2022. 『極限の思想 ハイデッガー——世界内存在を生きる』, 講談社.
- 辻村公一. 1971. 『ハイデッガー論攷』, 創文社.
- 中西敦貴. 2021. 「『存在と時間』における歴史化された超越論的哲学」, 『論集』第40号, 東京大学哲学研究室編, 105-117.
- 松本啓二郎. 2012. 「歴史性概念の諸相」, 『ハイデッガー『存在と時間』を学ぶ人のために』, 宮原勇編, 世界思想社, 268-287.
- 的場哲朗. 2001. 「ゲオルク・ミッシュのハイデッガー批判——“世紀の論争”を

追跡する」, 『理想』, 666, 理想社, 96-108.

溝口宏平. 1997. 「歴史現象の存在論的解釈について——ハイデガーの「存在史」をわれわれはどのように評価すべきか——」, 『現象学年報』, 12, 日本現象学会編, 110-118.